

ユニオン・フレームがウッドデザイン賞

仕様書完成で広がる可能性も

ウイング

ウイング（東京都、倉田俊行社長）が提案する杉の4×6材を活用した合理化構造「Union Frame（ユニオン・フレーム）」が「2×4工法床構面開発事業」として今年のウッドデザイン賞（技術・研究分野）を受賞した。杉の大径材の活用を主眼としており、「実用的で今後の普及拡大が見込まれること」「既に実証物件があること」が評価されたという。

ユニオン・フレームは、2×4の合わせ柱と2×10の床根太の一部を4×6に置き換えた構造で、床組みが簡素化される一方、床剛性が通常の1・3倍に高まり、約20%の材積の低減や施工の合理化、工期短縮が実現できる。

まぐさが不要になることで従来は難しかったサイズのサッシも取り付けられ、設計の自由度の

由度が増す。重機を使わず手運びで搬入できるため、狭小地でも施工可能で、通常のパネルに比べ工場で4時間、現場で3時間、作業を短縮できる。使用材積に占める国産材比率は70%前後（スタッド、合わせ柱、床根太、タルキ）に引き上がり、国産材による新たな訴求も可能になる。

同社では2019年度の林野庁補助事業で

仕様書及び設計・技術資料を作成。設計技術が確立したことを受け、今後の普及活動を建築技術支援協会に移管する。より公的な機関に普及を委ねることで、一般のコンポーネント

工場やビルダーが利用しやすくなるのが狙いで、2×4工法の市場拡大につなげることを目指す。

ユニオン・フレームは取り組みから1年強で、最近では月平均10棟



ユニオン・フレームの床組み

趣を受注しており、普及段階に入っている。従来は設計できる人材に限られていたが、仕様書の完成で一般の建築士でも設計できるようになれば、加速度的に広がる可能性もある。